

さらばもうな  
らば  
こころ  
は  
龍  
生  
人  
生13

GOOD BYE  
DRAGON LIFE.

永島ひろあき  
HIROAKI NAGASHIMA

# 目次

第一章	王都観光	7
第二章	邪竜教団	38
第三章	狂執の邪教徒	79
第四章	奈落に夜明けは来ず	150
第五章	話をしよう	173
第六章	冥界の再会	212
第七章	魂の循環	265



### ドラミナ

ドランと婚約し、学園に同行する為に  
使い魔になった  
元バンパイアクイーン。

### ディアドラ

妖艶な黒薔薇の精。  
ガロア魔法学院で指導員を  
務める。

### ドラン

最強の古神竜“ドラゴン”の  
転生した姿。  
ガロア魔法学院に通いながら  
故郷ベルン村の発展に  
取り組む。

### クリスティーナ

人間離れた身体能力と  
剣技を併せ持った  
絶世の美人剣士。  
“竜殺しの因子”を  
受け継ぐ。

### セリナ

使い魔としてドランに  
同行するラミアの美少女。  
ドランと婚約を  
果たした。

### スペリオン

アーcrest王国の王子。  
人当たりの良い  
好人物。

## 第一章 — 王都観光

「デアアドラさん、もういいんじゃないでしょうか！」

少女の不機嫌な声が、私の鼓膜を震わせる。

私ことドランは、ラミアの少女セリナ、バンパイアの元女王ドラミナ、そして黒薔薇の精デアアドラと連れだつて王都に繰り出すべく、滞在中の宿舎の正面玄関に集まっていた。

ベルン村の皆やエンテの森の知人達へのお土産の購入と思ひ出作り、そして後のベルン村発展に活かす為に王都の街並みを確かめようという目的で、王都観光を計画したわけだ。

競魔祭に出場していた各校の生徒には自由時間が与えられており、王都観光や、家族に会いに行く為に出て行く者達で溢れている。

そんな中、イロモノばかりの面々が揃っている私達は、皆の注目の的となっている。

先程不満を口にしたセリナに対し、私の右腕に自分の腕を絡みつかせて、ぴったりと密着しているデアアドラが、悪戯っぽく応える。

「あら、いいじゃない。私は使い魔じゃないばかりに、ドランとあまり一緒にいられないんですもの」

セリナが朝から不機嫌な理由はこれだ。

黒薔薇の精とはいえ、妖艶にして類稀なる美女の姿をしたディアドラと密着している私には、周囲の男性達から羨望と嫉妬の入り混じった視線が集中している。

確かに、大勢の生徒達の前でこのように異性と触れ合うのは、好ましくないか。

「それはそうですけれど、ディアドラさんはもう充分ドランさんとくっついたと思います。それだとドランさんが歩きにくいですし、離れてもいいと思いますよ！」

「ふふ、羨ましいからって声を荒らげるものではなくってよ？ 淑女然として優雅に構えているドラミナを、少しは見習った方が良いわ」

「それは見かけだけですよ、ディアドラさん。これでも、なんて羨ましいと、心の中では嫉妬の火山が噴火しています」

あくまで口調は涼しいが、ドラミナははつきりと首を横に振る。

「それを言ったら、私なんて毎日よ。貴女達二人は使い魔としてドランと寝食を共にしているので、羨ましくないわけがないでしょう？ だから、その分も今はこうしてドランとくっついてるの」

更に強く腕を絡ませてくるディアドラの笑みが深まるのに反比例して、セリナの機嫌は悪くなっ

ていく。

私の王都観光はディアドラを一旦離れさせて、曲がったセリナの臍を直すという仕事から始まるのだった。ふむむん。

ディアドラは、ほっこりして、見事に緩んだ顔である。普段の妖艶で落ち着き払った姿しか知らない魔法学院の生徒達が今の彼女を見たら、あんどりと口を開くだろう。

そんなディアドラが、当面の問題を指摘してきた。

「それで、私とドラミナは物珍しくらいで済むでしょうけれど、セリナはどうするのよ？ ガロアならともかく、この王都とやらでラムミアが通りを出歩いても騒ぎにならないの？」

王国中から様々な人々が集まる王都には、エルフやドワーフはもちろん、虫人や獣人、鳥人、蛇人などが多数見られる。

また、一口に虫人や獣人と言っても、蟻螂や蜘蛛、カブトムシに蜂、百足、あるいは猫、犬、狼、鷹、燕など……その種類は多岐にわたり、またそれらの中でも細かに分かれている。さながら、多種多様な種族の坩堝と言えよう。

しかし、彼らは皆亜人と呼ばれる種族であって、決して魔物ではないのだ。

セリナが魔物たるラムミアである以上、堂々と日中に闊歩するのは、好ましくない事態を引き起こすだろう。

ところが、当のセリナはこれ以上ないほど自慢げに胸を張って笑みを浮かべる。



「ふっふっふ、ディアドラさん。このセリナ、ありのままの姿ではドランさんと一緒に居られないという事態は前々から想定していました。そしてラミアにはそういった時の為の魔法もあるのです」

「あら？」

セリナは呑気<sup>のんき</sup>というか、どこか抜けている所がある印象だから、きちんと備えをしていた事が意外だったらしく、ディアドラの顔に驚きが浮かぶ。

私とドラミナはセリナの魔法習得に協力した側なので、彼女がこれから何をしようとしているのか、既に知っていた。

「正直に言うと、別にラミアだけが使える魔法ではないので、自慢出来るものではないのですが……行きます。——命の理<sup>ことわり</sup>よ 我が声に従え 我が身を 我が声を 我が肉を 我が骨を 我の思い描く姿に変えよ シェイプシフト！」

セリナが詠唱<sup>えいしょう</sup>を終えた瞬間、ワンピースの裾<sup>すそ</sup>から伸びる大蛇の下半身が光に包まれて、見る間にその形を変えた。

偽<sup>いつはり</sup>りの姿を纏<sup>まと</sup>う幻影系統の魔法とは異なり、実際に肉体構造そのものを変形させる高等魔法だ。

セリナの生まれ育った隠れ里では、彼女達が異種族の集落に潜<sup>もぐ</sup>り込む際に用いてきたという。

私と出会った頃のセリナはまだこの魔法を習得していなかったが、魔法学院に入学後の数々の激闘と、授業で学んだ事で魔法使いとしての腕前をメキメキと上げ、ついに習得するに至ったのだ。

光が収まると、人間と変わらないしなやかな二本の足を手に入れたセリナの姿が現れた。ディアドラは染み一つないセリナの素足をまじまじと見つめる。

「どうですか、ディアドラさん。これなら問題にはならないでしょう？」

「ええ、見事なものね。目と舌はそのままでけれど、それくらいなら平気でしょう。後は……」

ディアドラの口ぶりからまだ何か問題があるらしいと察し、セリナが不思議そうに首を傾げる。

「え、どこか変ですか？」

セリナにしてみれば会心の変身であつたろうから、まさか失敗があるとは思っていないに違いない。

「そうねえ、素足で出歩くのはお勧め出来ないわ。気の利くドラミナなら既に準備してあるでしょうから、これから買いに行く必要はないでしょうけれど」

ある種の信頼を含んだディアドラの視線を受けて、ドラミナはヴェールの奥で小さく頷いて肯定する。

「ええ、ガロアで見繕って購入しておいたものがありますよ。さ、セリナさん、こちらをお履きになって」

ドラミナは事前にセリナから預かり、自分の亜空間に仕舞っていた靴と靴下を取り出す。

ディアドラに自慢したい気持ち先走ってすっかり失念していたようだが、セリナはきちんと靴を持ってきていたのである。

夏の気配が遠ざかる昨今、セリナは襟元や袖に何枚も白いフリルを重ねた淡い緑色のワンピースを着用しており、質の良い革を赤く染めた靴は、その服装に良く合う。

私は真っ先に屈み込み、セリナの足を手に取って靴を履かせる。

彼女が【シェイプシフト】の練習を始めた頃から、靴を履かせてあげるのは私の役目だった。

しかし、これまでは男子寮の私の部屋で履かせていたが、多くの視線がある正門玄関でするのは軽率であつたろうか。

私に素足を取られたセリナは、頬を赤く染めている。

周囲から忌避される大きな原因であつた大蛇の下半身を人間の素足へと変えたセリナは、誰が見ても否定の言葉が出てこない、類稀なる人間の美少女である。

その美少女の足元に屈み込んで、遠慮なく素足を触って靴を履かせているのだから、周囲の若い男子達からの嫉妬は避けられない。

うむむむ、やはりセリナには部屋で姿を変えてもらった方が良かったか——と、少しばかりの後悔を覚えるが、ここで怯んでは喜んでくれているセリナを落胆させてしまう。

ならば、私は甘んじて嫉妬の視線の矢を受ける責務がある。それが男というものだ。

何度も練習した成果もあつて、私は滞りなく靴を履かせ終えた。

この作業には慣れたが、鱗のない滑らかな肌が変わったセリナの素足には、まだ慣れないところがある。

ついで必要以上に触れてしまい、ドラミナに何度窘められた事か。

セリナは嫌がっていないどころか望んでくれていたとはいえ、もう一人の恋人の目の前で堂々と見せるべき行為ではないわな。

セリナは支えにしていた私の肩から手を離し、靴の具合を確かめるべくその場で足踏みを繰り返す。

何度もねだった靴を買い与えられた幼子のように喜ぶセリナを、ディアドラとドラミナは可愛い妹を見守る姉の眼差しで見守る。

実年齢も精神年齢も立場も、まさしくその通りの三者である。ディアドラが奔放な次女で、ドラミナがしっかり者の長女、セリナがぼやっとしたところのある三女かな？

「ふふ、よく似合っているじゃない、セリナ。貴女っていう素材の良さもあるけれど、ドランとドラミナの審美眼のお蔭もあるかしら」

「セリナさんの為に色々と買い物するのは実に楽しかったですよ。変身を覚えたばかりの頃は立つ事もままなりませんでしたが、赤ちゃんと歩き方を教えるようなものでした。それなりに苦労しましたけれど、将来の予行演習みたいで、とても楽しかったです」

ドラミナは手で口元を隠しながらクスクスと笑う。

「ええ、それじゃあ、私がドランさんとドラミナさんの赤ちゃんですか？ 私は教えられる側よりも教える側の方がいいです」

セリナの小さな抗議には、私との間に子供をもうけるというささやかな意思表示が含まれていると、この場に居る全員が理解していた。

我ながら好かれたものだな。ふむん。

「あらあら、私も参加させてほしかったわね。私にも学院での仕事とその責務はあるけれど、仲間外れにされるのは寂しいわ」

少しだけ拗ねた口調のディアドラに、セリナは蛇の舌を唇からちらりと覗かせて謝罪した。

「えへへ、ごめんなさい、ディアドラさん」

ディアドラに子猫を扱うみたいになんかわしゃわしゃと頭を撫でられ、セリナはきやーと嬉しそうな悲鳴を上げる。

「はいはい、許してあげるわ。セリナは時々食べちゃいたいくらい可愛いわね。それで、今日はどこに行くか決めているの、ドラン？」

「ドラミナの王都同行を推奨してくれたマイラール、アルデス、ケイオス、ジャレイド、オルディンの神殿に顔を出すのは決定している。しかし、いかんせん王都は広い。時間を考えると、五つの神殿を回りがてら目抜き通りなどを経由して、各所を見て回る程度になってしまうだろう。それでも君らの為に何か買いたい物はないかと思ってるよ」

「それはいいけれど、貴方は自分の為にも時間とお金を使いなさい。ベルン村の発展に寄与したって考えているのなら、そういう事に詳しい学者の所に話を聞きに行くのだから、必要な事で

「しょう？」

「もう少し自由な時間があればそうしたかったけれどね。さあ、そろそろ行こう。それからディアドラ、あまりセリナの髪をわしゃわしゃしては、櫛を通さないといけなくなってしまうよ」

「あら、手触りが良いから、ついやりすぎちゃったわね。セリナ、大丈夫？」

ディアドラから解放されたセリナは、乱れた髪を手早く手櫛で整える。

ふむ、見たところ大丈夫そうだな。

「んもう、ディアドラさん、次からは加減に気を付けてくださいね。これくらいならまだいいんですけれど」

セリナは口を尖らせているが、実際にはまるで怒っていない胸の内が透けて見える。丸く収まって御の字だ。せっかく良くなった機嫌が、また悪くなつては困るからな。

さて、あまりのんびりしていると、周囲からの嫉妬の視線が物理的な殺傷力を帯びてきそうだし、貴族や大商人の方々からのお誘いの使者も来てしまおう。

「ここでじゃれているのも楽しいが、そろそろ出るとしよう」

私が声を掛けたのを合図に、ようやく私達四人は王都へと歩を進めた。

セリナは前述の通りの服装で、私は身分証明代わりの魔法学院の学生服に袖を通しているが、帯剣はしておらず、自分の影を亜空間に変えたシャドウボックスの中に仕舞い込んである。

ディアドラはいつもと変わらぬ黒薔薇が各所に咲いた黒のドレス。彼女の妖艶な魅力を実際立たせて

るのに、これ以上相応しい服装はない。

一方、普段は赤い薔薇があしらわれたドレスを好んで着用しているドラミナは、今日は気分を変えたらしく、襟や袖が青く縁取られて金糸の刺繍が施された純白のドレス姿で、日傘を手にしている。

ふうむ……傍からこの四人の組み合わせを見た時、どういう印象を与えるだろうか？

さしずめドラミナは顔を見せられないやんごとない身分の女性で、ディアドラはその護衛兼付き人、セリナが世話役の侍女で、私は使用人といったところか。

あるいは競魔祭で私の事を知っている者ならば、さっそくどこかの貴婦人が私を勧誘して連れ回っていると解釈するかもしれないな。

後者の解釈をしてもえれば私への勧誘の声が少しは収まるかもしれないが、それはいささか都合の良い期待というものか。

王都への道すがら、私はそのような思考に没頭する。

私達に宛てがわれた宿舎はお上品な方々の住む区画に建てられていて、通りに面した広い庭を持つ豪華な屋敷が並んでいる。

落ち葉一つないほど徹底した清掃が行き届いている道を行き交う人々は、いずれも付き人や護衛らしき人影を連れており、まず例外なく上流階級の住人だろう。

そんな人々も、日傘を差して歩くドラミナの姿を目にすると、ヴェールに遮られて顔を覗き見る

事も出来ないというのに、彼女の纏う積み重ねた歴史も格も何もかもが違う気品に気付き、雷に打たれたように足を止めて見つめている。

ドラミナはまさしく高貴という概念の体現者であり、ともすれば、彼女を目撃した過去の人間が高貴という概念を考え出したのではないか——そう思う者が居てもおかしくないほどである。

人々はドラミナばかりでなく、黒薔薇を全身に咲かせた異形にしてこの上なく妖艶なデアドラの姿にも気付いて、小さくない感嘆の声を零す。

ラミアの姿だったら別の意味で注目を集めたであろうセリナは、今は人間にしか見えない為、ドラミナ達ほど目を引きはしなかった。

それでも類稀なる美少女には違いないから、これだけの美しい女性達と行動を共にしている私には、妬ましさを隠そうともしない視線やひそひそ声が浴びせられる。

結局、王都に出てもこれか……と、私は思わずうんざりしたが、自分の立場を彼らに置き換えてみると、無理もない事だと納得出来た。

それに、これだけの注目が集まるほど素晴らしい女性達が恋人なのだと思うと、何より誇らしい。いっそ、どうだ羨ましいだろう、と胸を張って王都を練り歩くべきかな？

そうして私達は行き交う人々の足を止めさせながらも、まず王都の中で最大規模のジャレイドの神殿を目指した。

ジャレイドは法、秩序、正義などを司る大神であり、人間をはじめ多くの種族に信奉者を持つ。

ただ、ジャレイドに悪いとは思うのだが——私は前世の苦い経験の数々から秩序やら正義やらは、人間が都合の悪い行いを正当化するための方便として好んで用いるものと認識している。

ジャレイド自身は彼が司る権能に相応しい善き神だし、彼を篤く信仰する者達もそれに値する人格者なのだろう。

……後者に関しては、そうであってほしいという願望だが、これからお世話になる事もあるはずだし、偏見は消さないといかな。ふむん。

マイラールやケイオス、アルデスなどと違い、人間とはかけ離れた異形の姿を持つジャレイドだが、白一色の壮麗な神殿に集う信者の中には多くの人間達の姿があった。

ジャレイドを信仰する者の中でも、特に正義を重視する者は、俗世を旅して正義を為して、神の御心に応えようとす。

他の教団にも居る神官戦士とは異なり、教団からの指示ではなく自らの信仰と意志に従って旅する彼らは、世の人々から畏敬の念を抱かれています。

神殿に集う者の中に鎧兜に盾、剣や槍と、武装した戦士や騎士らしい姿が見受けられるのは、そういういた各地を旅する信者が道中で行いをジャレイドに伝える為に立ち寄ったからである。

彼らが真に信仰の念を持っているのなら、わざわざ神殿に足を運ばずともその声はジャレイドに届くのだが、そこは形式というものだろうか。

等間隔でそそり立つ円柱が三角形の屋根を支えるこの神殿には、柱や天井、屋根や壁など、いた

るところにジャレイドとその眷属達の神話における様々な場面がびっしりと彫り込まれている。ふうむ、無数の信者達の思念がしみ込んでいて、邪を祓う聖地に近い機能を持つに至っている。確かに、ここならば比較的ジャレイドと意思を交わしやすさだろう。

この神殿は聖なる場であるが、ラミアのセリナやバンパイアのドラミナの立ち入りを拒む様子はない。もつとも、たとえ私とジャレイドの繋がりがなかったとしても、セリナとドラミナなら拒まれる事はなかったらう。

それでも、神殿の醸し出す雰囲気の違いを感じ取り、セリナが背筋を正して神殿を見上げる。「こう、背筋を正さずにはいられないというか、厳かな気持ちになりますね。流石は大神様を奉っている神殿です」

エンテの森の世界樹——ユグドラシルを前にした時ほどではないが、普段は飄々としているディアドラも若干硬くなっているようだった。

「アルデス神やマイラール神は驚くほど親しみやすい方々だったけれど、こちらの方が普通なのでしようね。それを言ったら、うちのユグドラシル様なんて、素性を知らなかったら親しみやすさの塊みたいな方だけれど」

「エンテさんの見た目は、とつても可愛らしくて人懐っこい樹木の精ですものね」  
くすくすと小さく笑って言うセリナに、ディアドラはその通りね、と呟いて微笑んだ。

エンテの場合はユグドラシルとして見れば、まだ子供だからな。外見通りの精神年齢と考えてほ

ぼ間違いはない。セリナとディアドラの意見は正鵠を射ていると言えよう。

ジャレイドの神殿でも私達は参拝者達から注目を集めていたが、まもなく参拝客の整理をしていた神官の一人がこちらに気付いて声を掛けてきた。

誰に促されるでもなく自ら率先してイロモノ集団である私達に近づいてくるのだから、なかなかどうして肝が据わっている。

がっしりとした体格の二十代前半と思しき男性神官は、厳格な規律で知られるジャレイド教団の神官に相応しい謹厳な雰囲気を滲ませている。

「ようこそジャレイド神の神殿へ。私は法と正義と秩序を司る父なるジャレイドの下僕、トララトと申します。皆さんはこちらへ足を運ばれるのは初めてですか？」

見た目を裏切らぬ実直さを湛える声に、私は頷いて応える。

「初めて王都に来ました。本日はジャレイド神に是非とも奉じたい品がありまして、お伺いした次第です」

厳密に言うくと金貨などの貨幣の寄進ではないのだが、迷惑にはならない品を納めるつもりである。基本的に、各教団の運営は信者達からの寄進に依るところが大きい。それ以外には奉ずる神の権能に応じた何かで運営資金を得ている。

マイラール教団などは、教団秘伝の薬や作物を販売しているし、アルデス教団は天上の神々から伝えられた戦技を教える道場を開いている。

そういうえば、ジャレイド教団は何で稼いでいるのか知らなかったが、寄進や寄贈の品を断りはすまい。

「ありがたいお話です。ジャレイド神のご加護が貴方達にありますように」

トララトは恭しく胸の前でジャレイドの聖印を切り、短く祝福の文言を唱える。

正直に言うと、私達四人の中にジャレイドを信仰している者は居ないのだが、厚意はありがたく受け取っておこう。

「ありがとうございます。財貨でないのが少々心苦しいのですが、私が彫刻したこちらの石像を納めさせていただけます」

先方の期待を裏切っていそうで申し訳ない気持ちを抱きながら、私は足元の影に仕舞い込んだ石像を、念動を使って取り出す。

魔法学院の生徒である事は制服を見れば分かるはずだから、トララトに驚いた様子はなく、彼は石像の全体が露わになるのをじっと待っていた。

「おお、これは我らのジャレイド神とその眷属の方々のお姿……。しかし、なんと神々しい事か。まるで石像そのものが光を発しているかのようだ」

周囲の信者達や他の神官達も興味を隠さずにこちらを見る中、トララトの前にはジャレイドとその側近というべき高位の神達の石像全七体がずらりと並んだ。

石像はどれも私と同じくらいの背丈で、いずれも昨今のやや華美にすぎる作風の石像と比べると

地味な印象を与えるが、これは私の記憶にある彼らの姿をそっくりそのまま再現した為だ。

昔から人間は自分達の信奉する神を過剰に美化する傾向があるからなあ。

どこにでもある石が材料なのだが、あまりに精密に神々の姿を再現したせいか、石像からはかすかながら神気が生じている。

ふうむ……神殿で多くの信者達から祈りを捧げられたら、そう遠くないうちにジャレイドの意志を降ろすのに最適な器になってしまいそうな予感がする。

正確に再現しすぎたかな？

「この胸を打つ出来栄え、それにその魔法学院の制服。もしや貴方は……あのドラムン殿ではありませんかな？」

「ええ、ガロア魔法学院に在籍しているドラムンですが、どうして私の名前を？ 競魔祭をご覧になったのですか？」

「いえ、私は競魔祭には行っておりません。ですが、ガロアでそれは素晴らしい出来栄えの石像を彫る者がいると噂になっていたのでですよ。我らのジャレイド神の石像を含めて、多くの神々や古代の英雄、あるいは伝説の幻獣達の、あまりに生々しく、生きているかのような見事さ……。昨今の流行に属した過度に華やかな石像とは異なる作風は、今や注目の的となっています。魔法石工のドラムン」と言え、巷ではそれなりに知られているのですよ」

むむ、確かに魔法学院の事務局から私を名指しした石像の発注依頼が激増していたが、魔法石

工のドラン」とは……また知らないうちに二つ名が出来ているな。

石像の彫刻は念動を使ってごりごりと石を削るだけでよく、大した手間もかからないから、依頼を片っ端から受けて儲けていたが、こんな所で影響が出ていたか。まあ、悪い影響ではなさそうだな。

「自分の知らない所で有名になっているというのも、奇妙な気分にはさせられますね。あまりやりすぎると自分が魔法使いである事を忘れそうです」

「最初は、お風呂屋さんのドラン」で、次は、なんでも屋さんのドラン、今度は、魔法石工のドランですか。半年くらいの間によく変わりますね」

魔法学院に入学してからずっと一緒だったセリナは、私の二つ名の変遷を知っているから、実にしみじみと感想を零す。

私も同じ気持ちだよ。

どうやら私はガロア四強の、金炎の君、フェニアさんや、氷花、ネルネシアのような二つ名とは縁がないらしい。

嫌な二つ名ではないが、彼女達と比べると、どうにも縮まらない。

夏休み明けに魔法学院に就職したディアドラは、私の二つ名の変遷については耳にしていなかったらしく、愉快そうに口角を上げる。

「普通じゃないという意味では、ドランらしくっていいじゃない。それにあんまり物騒な二つ名な

んで、ドランは嫌でしょう？ 貴方はとても強い力を持っているけれども、戦いが好きというわけではないしね」

「私の事を分かってくれていて嬉しいよ。それに、二つ名は自分で吹聴して定着させるものではないさ。それではトララト様、これらの石像をお納めさせていただきたく思うのですが、ご迷惑ではないでしょうか？」

「迷惑など、とんでもない。貴方が彫刻された石像は大変な人気がありますから、正規に依頼をしたら暫く待たなければならぬところだったでしょう。貴方の誠心と共に、ありがたく受け取らせていただきます」

もし断られたら魔法学院の依頼で稼いだお金を寄進する用意はしておいたが、石像で喜んでもらえて何よりだ。

それから私達は他の四柱の神を奉ずる神殿を順に回り、同じように石像を奉納していった。

中にはガロアで私とドラミナが神々に対し誓約を交わした話を知っている方も居られ、長話に興じる事もあった。

教団側にしても、五大神が揃って同じような神託を降し、誓約を交わすというのは珍しい出来事らしい。

アルデス教団の神殿に顔を出した時には、老いた神官から、ぬは神様の笑いが響き渡ると

いう、大変めでたい事があった——などと嬉しそうに語られた。

おそらく、競魔祭の決勝戦でジェル魔法学院ハルトの魔剣とやり合っている時、アルデスが盛大に笑っていたから、それが信徒達に届いたのだろう。

まあ、悪い事ではないし、今更何が出来るわけでもない。とりあえず私は、老神官に、それは良かったですね」と同意しておいた。

全ての神殿に奉納を終えた頃には、太陽が中天に掛かっており、私達は王都の中ではそれなりに裕福な人々が住まう区画にある一軒のレストランに腰を落ち着ける事にした。

座一つなく清潔に整えられた店内は落ち着いた雰囲気、王都近郊の風景画や季節の花々をかけた花瓶が、目立ちすぎない程度に配置されている。

店内は身なりの良い人々が八割ほどを埋めていて、七十人ほどで満席といった広さだ。

入店してすぐに、青年の店員が私達を六人がけのテーブルに案内してくれた。

この世の美人全てを集めてもその最上位に君臨する美人揃いの集団はここでも当然目を引き、店員や客達は陶然と蕩けた視線をこちらに寄せ越してくる。私に向けられる視線もいつも通りである。

並の神経の男が私の立場に置かれたら、今日一日だけで胃に無数の穴が空いてしまいそうだ。

テーブルに置かれた品書には、陸路と空路を介して集められた王国各地の食材を用いた料理の名前と、手描きの絵、簡単な説明が書かれていて、食欲をそそられる。

パンパイアであるドラミナは白ワインと季節の野菜サラダを、黒薔薇の精であるデアドラも果汁を搾って水で割ったものだけを頼んだ。

二人とも人間と同じ食事を取る事は出来るが、生命維持に必要なわけではないから、人間並みの量を口にするところはほとんど見ない。

一方、セリナは品書を睨んで少しの間迷っていたが、すぐに決めたいらしい。枝豆のムース、七色アワビのフライ、青菜と挽肉のオムレツ、豆と茸のグラタン。私も彼女と同じものを注文する。

市場を見た方が正確な情報を得られるだろうが、この店の料理一つでも王都で手に入る食材の豊富さが分かる。

国内の主要な陸路が王都に繋がっているのももちろん、やはり飛行船によって空路が出来た事で遠地にある食材がより早く、より大量に、より安価で手に入るようになってきているな。

東西南北それぞれの地方の名物とされる食材が散見されるし、それらは乾物や燻製など長期間の保存に適した加工がされたものではない。

これからは陸と空の交通機関の発達と整備が、都市部の発展により大きく寄与する事になるか。陸路の発展には馬車以上に高速かつ大量に人間や荷物を運べる交通機関が必要だし、空路は飛行船と港の整備が不可欠。それらの開発競争は盛んになっているという。

近隣諸国の技術水準を考えると、魔力を使った魔法機関か蒸気機関辺りが遠からず開発されるところだろうな。

天人の遺産を上手く活用出来ていれば、既に実用化の目処が立っているかもしれない。

多次元宇宙に存在する多くの人類の文明に目を向ければ、確か機関車とか自動車？ とかいう箱型の乗り物が長期間にわたって運用されていたと記憶している。

私の手で開発するのもありかもしれないが、アレらは乗り物自体もさることながら、それらを運用する為の交通網と、法の整備に時間がかかるからな。単に開発するだけでは済むまい。

ならばゴーレム製造技術の応用で機関車などの開発を——などと考えていると、それが顔に出ていたらしく、フォークとナイフでオムレツを切り分けていたセリナに軽く怒られてしまった。

「もう、ドラランさん、難しい事を考えておいででしょうか？ 眉間に皺が寄っていますよ」  
いかんな、せっかくの食事だというのに無粋な真似だった。これは反省の必要ありだ。

「すまない。つい考え事をしてしまったよ。ここでは王国各地の食材が料理に使われているからな。ベルン村でもこうして各地の特産品を集められるようにするにはどうすればいいか、考えていた」  
幸いセリナはそこまで怒った様子ではなく、仕方ないなあ、と言わんばかりの苦笑を浮かべる。

「もう、ドラランさんの故郷大好きなところは相変わらずですね。でも、お食事をしている間はお料理に集中するのが、お料理してくださいさった方と食材への礼儀ですよ」

「セリナの言う通りだな。考え事は食べ終えてからにするよ」  
反論の余地がない言葉を受けて、私は降参する他なかった。

ディアドラは食事という行為に対して、糧となったモノへの礼儀などという観念はさほどないら

しく、こういう話題には関心を示さない。全てのモノの命を直接食らう黒薔薇としての感性だろう。

対照的なのはドラミナで、生命維持を生物の血液に依存する種族である事と、本人の性格から、食事という行為には酷く気を遣うところがある。ただ、今回は私に味方してくれた。

「セリナさんの言う通りですが、ドラランが考え事をしてしまうのも分からなくはありません。食材に限らず、交通網の発達は人材と情報とお金の流れに直結します。それを把握し、掌握出来れば、巨大な力になりますから。交通網が未整備であったとしても、それが整備された後の事を考えれば、先行投資や実現性について前もって検討しておくのは大切ですよ。私の国の場合は、先達が既にほとんど整え終えた後でしたから、あまり偉そうな事は言えませんが」

ふむ、やはりかつては一国の女王であったドラミナである。目下、政に関する相談相手としては、水龍皇として龍宮国を治める龍吉と並んで非常に頼りになる。

とはいえ、この私が政などというものに関われるようになるのは、さていつになるやら。焦る必要はないが、かといってあまり悠長に構えるものでもあるまい。

今回の競魔祭で色々なところに私を売り込む事は出来たし、ガロアの総督府の方でも目を付けた事だろう。

幸いにして、私は王国北部の貴族のご令嬢達との縁もある。だが……

「そうだな。ただ、今は皆との食事の時間だ。余計とは言わんが、無粋な真似をしたと反省しているよ。さあ、冷めないうちに頂いてしまおう」

一通り食事を楽しみ、食後に出されたスオム茶で咽喉を潤しながら、私とセリナは午後からの予定を話した。

この後は食材や衣類、薬種や建材、鉱物を問わず王都の市場を見て回ると、お土産を求めて商店巡りをしようかと決めている。個人的には、後々役に立ちそうな書籍や、魔法関係の素材や道具を取り扱っている店を回りたいとも思っている。

「王都に明るい方が居ないと、どこに行けばいいか迷うな。もちろん、何も知らない所を歩き回るのも楽しいがね」

「もう少し時間が取れていたら良かったのでしようけれど、競魔祭向けの特訓はともかく、観光の下調べは準備が足りていなかったわね」

ディアドラの言う通り、競魔祭の事ばかりを意識しすぎたかな——と、お茶の最後の一口を飲みながら、私は反省していた。

あれもこれもと欲張っても中途半端になってしまいそうだから、ある程度見て回る先は絞った方が良さそう。

楽しくも悩ましい思案を巡らせていると、私達の近くの席でまったりと談笑していた二人組の男性客が立ち上がり、声を掛けてきた。

「失礼、もし王都観光でどこに行くかお悩みなら、おれ達が力になれるかと」

「貴方は……」

声を掛けて来た青年の顔を見て、私はかすかに眉を上げた。

そんな私の反応を受け、青年は悪戯に成功した子供のようになさく笑う。

こちらを不快な気分させる要素が欠片もない、爽快な笑みだった。人誑しの素養がある青年だな。

「名乗りもせずに失礼した。おれはリオン。とある騎士の三男坊で、年中遊び回っているから王都の案内役としては適任だと思う」

自らをリオンと名乗った金髪の青年と、その傍らに立つ少し軽薄な印象を受ける青い髪の青年。正直に言って、不意を突かれて私は少々困惑した。

なんともはや……良くも悪くも影響力のある方と遭遇してしまったぞ。

私は自らを騎士の三男坊と名乗った。我が国の王太子と瓜二つの青年を見つめた。

彼らは私達を待ち構えてこの店に居たのではない。私達を尾行している者は居なかったし、運命神の干渉や意図が働いた痕跡もない。となると、ここで出くわしたのは全くの偶然か。

先日の、アークウィッチ、メルル女史との手合わせの件といい、どうも王都には私達を困らせる出来事がいくつも、大口を開けて待ち受けているらしい。

「いやあ、おれは止めたんだよ？ せっかく年頃の男女が楽しそうに食事しているんだからさ、お邪魔しちゃ悪い、雰囲気と空気を読みましようよって。でも、若は聞いてくれなくてね。本当に悪いね」

こちらが口を挟む暇もなく喋るのは、リオンと一緒に居た青年で、シャルルと名乗った。

シャツ、ズボン、スカーフ、ボタン、腰に帯びた剣といい、二人が身につけている何もかもが、一目で高級品と分かる。

一応、隠しているらしい彼らの素性を考えれば、これでもまだ安い品でまとめた方なのだろう。自らを騎士の三男坊などと口にしたリオンは、シャルルの弁明を聞いて困ったように頬を掻く。

恋人達の逢瀬を邪魔したのは紛れもない事実であり、無粋な真似をしたという自覚はあるようだ。後で正式に呼び出せば私に断る選択肢はないというのに……まったく、こんな時に声を掛けてこなくてもよいではないか。

「シャルルの言う通りだな。実は今年の競魔祭を観戦する事が出来て、その時に君の活躍を目にしたんだ。食事をしに来た先で出くわすとはなんたる幸運かと、つい舞い上がって、君らの都合を考えずに声を掛けてしまった。すまなかった」

リオンに誤魔化している様子はないし、このようなつまらぬ嘘を吐く方でもあるまい。ここはそう信じておこう。

「評価して頂いた事は感謝します。しかし、確かに突然ですね。私の自己紹介は不要だと思いますが、こちらの女性達の紹介は必要でしょう」

セリナ達の紹介をしようとする、シャルルは揉み手をせんばかりに嬉しそうな表情を見せる。

「おお、それはありがたい。そちらの白いドレスのご婦人は顔が見えないが、他の方々と同じで、

とびっきりの輝きを持った宝石だったのは間違いないからね。是非、名前だけでも教えてほしいってもんだ」

ふむ、軽薄な印象を裏切らぬ態度だが、リオンの傍に付いているのだから、それだけの男ではあるまい。

振り返ってみると、これまでこういう男性は私の周りには居なかったな。そういう意味では新鮮な方である。

セリナ達も競魔祭の会場にいたので、唐突に自分達に声を掛けてきた青年達の正体に気付き、大なり小なり驚きを見せていた。といっても、露骨に驚いているのはセリナくらいのもので、ディアドラとドラミナは、おや、程度の反応だ。

「では……こちらが私の使い魔のセリナ、ヴェールで顔を隠しているのが同じく使い魔のドラミナ。そして、そちらの黒薔薇に彩られているのが、ガロア魔法学院で教鞭を執っているディアドラです」

「使い魔？ 確か君の使い魔は——いや、姿を変える魔法か」

リオン達は事前に私の魔法学院での成績などにも目を通していたろうから、私の使い魔がラミアであると知っていてもおかしくない。

だからこそ、ラミアであるはずのセリナが人間にしか見えない姿である事に驚いたのだ。どうしてそう見えるのかという理由にすぐさま思い至ってくれたお蔭で、説明をする手間は省けたが。

「その通りです。王都で騒ぎを起こすつもりはありませんから。ところで、リオンさんと行動を共にする事で、王都の騎士団に追いかけて回されるような事態にはなりませんかね？」

リオンがシャルル以外の誰にも言わずに城下を出歩いているとなると、そうなる危険性は大きい。この様子ではお忍びをするのは今回が初めてではないだろうし、騎士団の方も対応に慣れていそうだ。

二人の素性の深いところまでは尋ねないが、余計な面倒には巻き込まないでほしいと暗に釘を刺した私に、リオンは人懐っこい笑みを浮かべて答える。

「それは大丈夫だ。家に戻らず夜を明かしたとなればいさか問題だが、王都を案内する程度の時間なら、騒ぎにはならないよ」

「随分と慣れてるように聞こえますが、ひよっとして、普段からこのように市井に出歩いておいでなのですか？」

リオンは私の指摘を笑って誤魔化す。

常習犯か。まあ、治める民の暮らしを直に見た経験もなく、周囲から教えられた事だけで国政の舵取りをする頭でっかちよりは良いと感じるが……

「普段から甘やかしておられるのですか？」

「甘やかすほどじゃないが、大目に見る事はあるな」

私から矛先を向けられたシャルルは、おどけた様子で肩を竦め、視線を逸らした。

どこか後ろめたいものを感じさせるこの仕草……リオンのお忍びに付き合っ、おこぼれを貰っているな？

真面目だが柔軟なところのある主と、軽薄だが目端の利く従者か。とりあえずは、お互いの性格を補える組み合わせと言っておこう。

「意外な事を知ってしまいました。私が口を挟める問題でもなさそうです。こうして出会ったのも何かしらの縁というものでしょう、お言葉に甘えて、王都の案内をお願いしたく思います」

セリナ達と水入らずとはいかなくなったのは果てしなく残念だが、頭上に戴く方の人となりを知る希少な機会であるのも事実。

こうなった以上、その機会を存分に活かすしかあるまい。

「ああ、大船に乗ったつもりで任せてほしい。それと、私の好奇心のせいで君達の楽しみを邪魔してしまったお詫びに、ここの払いは私が持とう」

おや、太っ腹。

王国の予算と王家の予算は別に分けられていると言うし、リオンの財布に入っているお金はリオンの領地からの税収か、投資先の商会などからの配当金だろう。

……おっと、余計な詮索はするまい。リオンは王家とは縁もゆかりもない騎士の三男坊だったな。まあ、そういう事情なら、リオンの財布が軽くなったとしても国民の血税を浪費させたという罪悪感に襲われずに済む。

「でしたら、食後の甘いものでも頼みますかね」

私が遠慮の「え」の字もなく、品書に目を落とすと、セリナも半ば自棄になって次から次へと注文していく。

「それなら、私はこれとこれとこれと……」

「セリナ、あまり食べすぎてお腹に余計な肉が付いても知らないわよ。砂糖とバターがたっぷりじゃない。……それと、せっかくのお申し出だけれど、私はもう充分よ。お気持ちだけ受け取っておくわ」

「私もディアドラさんと同じくです。ドランとセリナさんがその分頼まれるでしょうし、見ているだけでお腹一杯になれそうです」

ディアドラとドラミナは種としての特徴から追加の注文はしなかったが、私とセリナは遠慮を忘れて次々と注文を重ねていく。

お言葉に甘えた結果なのだが、当のリオンはまさかここまで大量に注文するとは考えていなかったらしく、軽く目を見開いて苦笑を零した。

「ここまで遠慮がないと、むしろ清々しいくらいだな」

「遠慮をしすぎるのも非礼かと思えますので」

私としてはせっかくの逢瀬を邪魔された事を、これでお相子にしたという認識であったし、セリナも同じであろう。

まあ、確かに王都の観光案内としては破格の相手を期せずして得られたわけなのだが、この縁は良きものとなるか、悪しきものとなるか……はてさて。

目の前で財布の中身と睨めっこをしている爽やかな好青年の前に、私は少しだけ悩んだ。